

令和元年度市政懇談会（教育分野）会議録

- 期 日：8月22日（木）
- 場 所：ありえコレジヨホール
- 参加者：13人

本市が取り組んでいる教育施策の一層の推進を図るため、市内小中学校に勤務している先生方に参加していただき、現在の取り組みについての効果や要望、提案などについて懇談しました。

以下、主な懇談内容。

市費支援員について

【参加者】

・学力向上推進員として視察に参加した。福井市内の学校でも特別支援教育助手を配置しており、特に低学年に配置している。低学年から指導することが大事だと感じた。南島原市でも同様の取り組みを行っており、長い目で見た教育が必要だと思っている。全国学力・学習状況調査時点だけを見るのではなく、低学年のうちからしっかりと学ぶ姿勢、学ぶ楽しさを教えていくために、今後も支援員の配置は重要であり、私たち教員も助かっている。

【市】

・福井市は全国でも1，2を争う上位である。本市でも同様にサポート体制がしっかりしているということの評価していただきありがたい。

【参加者】

・サポートの仕方も小学校と中学校で違う。その子の困っていることに合わせた指導方法を、特別支援教育助手と話し合いながら進めることができるので助かっている。その子に合うような支援の仕方をお互い考えながらやっていくことができるので、ぜひ、今後も続けていただきたい。

【市】

・働き方見直しにおける学校支援員を今年度新たに配置して、教職員のサポートを行っていただいている。支援員の配置について他市からよく尋ねられる。他市から見ても評価される事業のようだ。現在、市内全23校のうち22校に配置しており、1校配置できていない。全校に配置を考えているので人材確保に努めたい。

※市費支援員配置状況（令和元年7月現在）

	特別支援教育助手	学校支援員	ICT支援員	心の教室相談員	施設相談員
小学校	25人	14人	1人	4人	6人
中学校	10人	8人	1人	7人	

学校施設のスペースの確保について

【参加者】

・最近、支援が必要な子どもが増えている。特別支援教育助手に教室に入ってもらくのも当然だが、少人数で勉強できれば、より効果が上がると思っている。しかしながら、教室を確保することが難しいので、パーティションで教室の中を区切って学習すると、落ち着いて学習することができる。学校の一学期の反省会議の中で、低学年では他と遮断された空間があれば落ち着くという話題になった。パーティションがもう少しあればよいと話をしている。

※「パーティション」…教室やスペースを区切るためのついたてのような設備。

・本校はオープンスペースで、特別支援学級がある。ドアがない教室で学ばせる中で、他と遮断された空間を確保するということが本校の課題だと思っている。特別支援学級の子どもも困っている。通常学級の支援を要する子どもも確保されたスペースがあれば落ち着くのではないかと思っている。可動式のアコーディオンカーテンなどで空間を確保できるとよい。

【市】

・簡易なついたて式でいいのか。

・費用面は抜きにして発言してかまわない。その中で、どこまで出来るかを考えていかなければならない。

【参加者】

・本校はついたて式で十分である。

・本校は特別支援学級の子がいるので、しっかりとしたものがいい。やはり、人が通るだけで気になってしまい、そういう状況で授業を受けなければいけないというところが難しい。

・本校は壁が可動式で自由に使えるので、その辺は便利である。特別支援教育助手も非常に助かっている。

教員の増員配置について

【参加者】

・各学力調査について、課題は結果が二極化していること。これをどうやって引き上げていくか、時間割を調整し少人数指導で行うなどしている。また、通級指導教室も増えてきている。去年まで通級指導教室の先生が常時おられたが、今年度は他校に通級指導教室が立ち上がったので、先生が兼務で週に行ったり来たりしている状況のため時間数が組みづらく、加配をお願いしたい。通級指導教室は専任の教員でお願いできると助かる。

※「通級指導教室」…大部分の授業を在籍する通常の学級で受けながら、一部の時間で支援が必要な児童生徒に対して、実態に応じた特別な指導を行うための教室。

※「加配」…「加配教員」の略。教職員は、法令に従って学級数で配置される数（教職員定数）が決まっているが、それを超えて措置される教職員のことを指す。少人数指導加配、専科加配、児童生徒支援加配等がある。

【市】

・通級指導教室は全国的に非常に増えている。子ども達の数によって教員の配置の数が決まっており、定数の中で国の補助があり、配置の人数が決まっている。通級指導教室というのはあくまでもその外枠である。教員の配置は県の裁量であるため、県に加配希望をお願いしているところである。

・本市の発足時から児童生徒は4割程度減ったが、特別に支援を必要とする児童生徒は4倍に増えている。落ち着いて席につけないなど、全国的に増えているようだが、特別支援教育の必要性が高まっているのは何が原因だと感じるか。

【参加者】

・保育園や幼稚園の先生方が、小学校就学前の園児について何か把握していらっしゃると思うので、その方たちから声を聴くのもいいのではないかと思う。現在は、いろいろな実態が認知されるようになり、認知件数が増えたのかなと思う。

学力向上と部活動について

【参加者】

・南島原市は、教室へのエアコンの設置や市費支援員の数は、他市の状況と比べると手厚い教育環境だと思う。

学力向上について、市長が言われる「一人ひとりの“しあわせ”」で、“しあわせ”には多様性がある。全国学力・学習状況調査の平均点を超えれば“しあわせ”なのか。学力をどうとらえるかだが、人間としての生きる力を学力としてとらえる視点がないと、一人ひとりの“しあわせ”とは違ってくると思う。支援を必要とする子どもたちが、全国学力の平均をとることが“しあわせ”なのかと現場にいると感じる。

また、中学校の現場では部活動への対応が一番の課題である。教員も家庭と仕事を両立させないといけない。しかしながら、部活動を通して子どもたちが成長することは大きい。そう考えたときに、部活動指導員という制度を導入していただければ助かる。

【市】

・各学力調査では、普段の力を出して調査に臨むべきと考えている。それぞれの子どもたちがしっかりと学力をつけていくように子どもたちも頑張ってもらいたいし、そういう指導を行っていただきたい。

・狭義の学力と広義の学力を区別して考えないといけない。学力調査の結果をいたずらに悲観することはなく、学力を測る尺度の一つとしてみている。これからは「生き抜く力」がより重要視されていくと考える。

【参加者】

・部活動について。外部指導者が多く来てくださっているので教員の負担は軽くなっている。専門の方が教えてくれるので子どもたちも尊敬している。外部指導者が増えてほしいと考えている。

・外部指導者の存在は助かっている。他県での事例になるが、部活動指導員として市で雇っているところもある。別件で、部活動において生徒数が減っているため、2校合同で出場したりしている。練習も移動が大変な状況であり、スクールバスの活用ができれば保護者の方にも喜ばれると思う。

【市】

・現在、実際に複数校で部活動をやっている。中体連でも複数校で参加が可能となっている。今後、そういった状況が増えていくことを考えると、スクールバスの活用も一つの方法として検討の余地はある。

部活動の指導について、現在、外部指導者を全中学校で80名お願いしている。先ほどの話は、部活動指導員という制度を作って、学校の職員として位置づけるということになる。そうすると新たな費用も発生し、指導者も学校教育の条件に沿う方となり、研修も必要になるなどハードルが高くなる。即導入というわけにはいかないため、今後、検討が必要である。

ふるさと教育について

【参加者】

・授業で地方活性を考える中で、生徒に「南島原市は好きか」と尋ねると、ほとんどの子が「好き」と答える。「将来住みたいか」と聞くと、あまりいない。現状として高校を卒業すると県外、市外へ出て行き、南島原市に帰ってくる子どもが少ないのかなと感じている。本市のよさを授業の中で発信し、子どもたちが市の魅力を感じて、将来的に住んでくれたらいいと思う。私たちも教員として、そういった取り組みをしていきたい。昨年、長崎大学の教育学部附属中学校の授業で、本校の取り組みを紹介していただいた。子どもたちが小中高でどう感じて育っていくのが大事である。

・自分の住むまちを好きになってほしいと思い、総合的な学習の時間の授業を計画している。南島原市は、ヒストリア教育で原城跡へ行く場合、バスの補助がある。地域に密着したふるさと教育ができるということは大変ありがたい。

【市】

・2060年に人口3万人を確保しようと計画をしているが、かなり難しい。いろいろな施策をしているが、期待どおりになっていない状況である。市としてももっとわかりやすく発信していかなければと考えている。先生方にも協力をいただいて、子どもたちにも本市の魅力を発信していただきたい。

CT教育について

【参加者】

・電子黒板が各学校にあるが、実際現場では使える先生が少ないと感じる。私自身、使っている授業をしたいと考えているが、現実的にはまだまだ使えていない。また、体育の授業において、タブレットがあれば、体育館などで実際に見せながら授業ができるので、質も上がると感じている。

【市】

・電子黒板については、思ったほど使われていないということだが、こういった課題があるか。

【参加者】

・小学校は、電子黒板が各教室に設置され、担任がほぼ授業を行っているので、結構使っている。

・算数や社会など立体的なものを見せることができるので、小学校はどの教室でも使われていると思う。

・中学校は各教室設置ではない。教室移動や教室の利用調整が必要であるため、すべての先生が利用している状況ではないと思う。

【市】

・あくまでも電子黒板は授業の手段なので、学力を向上させるために各先生方がどう判断されるかになる。中学校は教科によって使う教科と使わない教科があるので、各教室までには必要ないと判断している。しかし、使うことによって視覚的に訴える有効な手段なので、できるだけ活用していただければと思う。

【参加者】

・電子黒板だけではなく、デジタル教科書があればもっと活用できる。

【市】

・デジタル教科書は費用が高く、教科書も4年に1回変わる。そのため、そのたびに入れ替えの必要が出てくる。教科を決めて段階的に導入できないかを考えている。

EATの配置について

【参加者】

・EATの先生が来て外国語活動の授業が変わった。EATは元々教員であるので小学校の教員にとってはハードルが下がり助かっている。日本語もしゃべれない中で大変だろうが、日本の学校の学びや、コミュニケーションが図られて、本当の交流ができていると感じる。

※「EAT (English Assistant Teacher)」…市費雇用の英語指導助手。フィリピンの現役教員を現在6名雇用し、各小学校で担任と連携し、外国語活動の授業を行っている。

【市】

・ALTの先生方と違い、実際にフィリピンの高校の英語の先生に来ていただいている。子

どもたちに対する対応についてはわきまえていらっしゃると思う。

・教科としての外国語が5、6年生に導入されると5、6年生を希望する先生が少なくなるのではと危惧していた。現場の先生方が助かるということであれば、これからも続けたい。

エアコンの設置について

【参加者】

・普通教室にエアコンを設置していただき非常に助かっている。音楽室などの特別教室にもエアコンがあったらと思う。

【市】

・特別教室にもいろいろあり、優先順位を決めて導入方向で検討している。

【市】

・今日は、多くの現場の声をいただいた。その声をしっかりと受け止めて、できる限り子どもたちの教育のために取り組んでいきたい。